木村文助研究

通信13号

2006年4月6日

「稲刈り」を書いた田島たきさん逝く

今年三月田島さんは満九七歳で大往生を遂げた。一九〇九年（明治42）生まれで、旧大野町の七飯町に近い家で生涯暮らした。

大野尋常高等小学校では木村文助指導による綴り方が月刊雑誌『赤い鳥』に続々入選し、その中で高等科の田島さんは一九二四年（大正13）一月号「稲刈」、同年六月号に「身代わりの金」と続けて入選した。

三年後木村は、『村の子供』という生活綴り方文集を発行し大きな反響があった。勿論田島さんの作品も載った。

一九九九年寄付金によって「赤い鳥・復刻版」全巻を購入し展示会を開いた。田島さんは早速足を運び自分の載った本を手にし懐かしそうに眺めていた。

二〇〇二年北海道ＳＴＶラジオ番組の北海道百年物語「木村文助」で、たきさんの「稲刈」が入り、手伝う家業を素直に表現され放送された。翌年、「教育広報おおの」で「身代わりの金」が載った。

二〇〇四年三月、ＮＨＫ大阪テレビ局「その時歴史が動いた」取材班がビデオ撮りで田島宅を訪れた。九〇歳を過ぎても矍鑠（かくしゃく）たるものでライトに照らされながら思い出して綴り方を読み、雪の消えた田圃に出てノコギリ鎌と稲藁を手にして稲刈りを演じた。残念なことにテーマが別になり放映はされなかった。

北斗市資料館に、田島さんらの写真と入選作がセットで展示されている。

ご冥福をお祈りする。

◆◆◆◆

二〇〇五

一〇・六　木村文助研究通信12号発行

二〇〇六

一・一　教育広報「おおの」No.114号発行（合併により最終号）

一・一　札幌市平中忠信氏より中学校時代の木村文助の入った写真が資料室に届く

二・1　上磯町との合併で大野町郷土資料室が北斗市郷土資料館になる

二・八　荒木恵吾氏（函館市・旧南茅部町）ご逝去。九七年に講演「木村文助」の講師を務める

二・一　新会員紹介　近江幸雄氏（函館市）二〇〇二年北海道新聞「歴史・どうなん人物散歩」木村文助を書く

二・一　新会員紹介　落合治彦氏（旧上磯町）二〇〇二年「目で見る函館・上磯郡・亀田郡の一〇〇年」の執筆の一翼を担う。大野の綴り方を解説に挿入する

三・一二　田島たき氏ご逝去

連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

まる一のお母さん（推奨）

大野小高二　松原とよ

まる一のお母さんが五十位の時、寒中に町から来て、氷でてかてか光っているところへ転んで腰をうってから、てんかん病になるようになりました。家の中を歩くにも杖をつきました。そして腰に膏薬をいっぱい貼って、痛そうにしていました。

ある時、まる一のお母さんが私を呼ぶので行ってみると「砂糖買って来てけれ」と言って、十銭札をのべて「隠して持って来てけれ」と言ったことがありましたが、それは一回や二回でなく、毎日、癖のように十銭ずつ買うのでした。その銭は誰もいない時、草花を売るとほうまつ（ほまち）をするのです。お母さんは誰も知らないと思っているのですが、お父さんも娘たちも皆知っているのです。ほうまつしたのをお父さんに見つけられて、叱られてからは、着物のえりを綻ばして（えりの縫目をほどいて）、その中に入れていたこともありました。

お母さんは病気がおきると、そこらいっぱいうなりながら廻って歩くのです。そうすると、つねちゃんや吉代ちゃんたちは、ぎっすり（ぎっちり）つかんで気をしずめてくれます。お父さんなら、かえって叱ったりして可哀そうでした。

ある時は、便所で乱気になって（乱心して）廻って歩くのを、私たちが見て止められないので、家へ行って教えると、つねちゃんが走ってきて、ようよう上げると、もう正気づいて自分の体を黙って見て、肩のあたりの汚いものを手で取っていました。銭湯へ行って（発作が）起こったり、道路で起こったりしたこともありました。それが一日に何回もあったので、お父さんは家の人たちに、かもよかもな（かまうな、かまうな）、と言っておりました。そして間隙なく（ひまなく）お母さんを怒ってばかりいるので、お母さんは何も言わず、聞かないふりをしています。外を通る人を見ると、知っても知らなくても「寄って茶飲むべし」と呼んで癖のようでした。その度にお父さんは「腐れ馬鹿や、飲ませねくてもいいでぁ、腐れ犬ぁ」と、悪口を言うのでした。

死ぬ前の年あたりは、自分の若い時のことを知らせたり、もろぐ（もうろく）したような話ばかりしてお父さんに叱られ、きせるで手をたたかれたりしました。今、考えて見ると、なんだか、お母さんが、可哀そうになります。（大正十四年十月号）

■ことばの意味

【まる一】屋号の㊀のこと。

【てんかん病】遺伝や外傷などで起こる脳障害。意識を失ったり無意味な動作を始めたりする発作や、頭痛・吐き気などの発作がみられる。

【膏薬】薬を練り合わせた外用剤。布片などに塗ったものを患部にはりつけて使う。

【ほまち】帆待ち。個人的にひそかにたくわえた金。へそくり。

【もうろく】年をとって頭脳や身体のはたらきがおとろえること。老いぼれること。

【きせる】煙管。刻みタバコを吸う道具。

●綴方選評

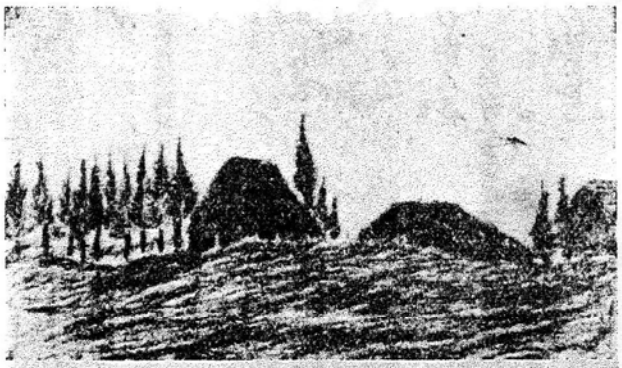
鈴木三重吉

高二の松原さんの「まる一のお母さん」は、かきにくい題材をよくまとめて、実象味多く写し出しています。悲惨な人間生活の一つの記録として、かなり深刻味のある特異な作品です。おあしを着物の襟へかくしたりして、お砂糖を買ってなめたりするところなぞも、その事例一つで、ほとんどその人の心的生活までの全体がうかび上がって来ます。「ほうまつ」は「ほまち」で、内緒でくすねてためたお金のこと。「ぎっすり」は「ぎっしり」の意味でしょう。「かもなかもな」は「かまうなかまうな、ほうっておけ」の意味です。お父さんのたったそれだけの言葉で、その人の面目や、お母さんに対する平生の態度が、すっかり浮かんでくるからふしぎです。お母さんが通る人さえ見れば「入ってお茶を上りよ」と言い言いして、お父さんからどなりつけられるところなぞもいかにも情景が躍如として哀れです。「呼んで癖のように」は「いつもくせのように、そう言って呼びかけた」の意味です。「もろぐ」は「もうろく」です。

●自由画選評

山本鼎

釜澤みつさんの「風景」—簡単だが、調子のある、気持ちのよい絵だ。二つの屋根など、しっかりして軟らかみもあり、なかなかいい。ただ大事な前景の草原が見たりない。



風景（佳作）　大野小尋五　釜澤　みつ
（昭和２年１月号）

「赤い鳥」に載った綴り方の掲載について

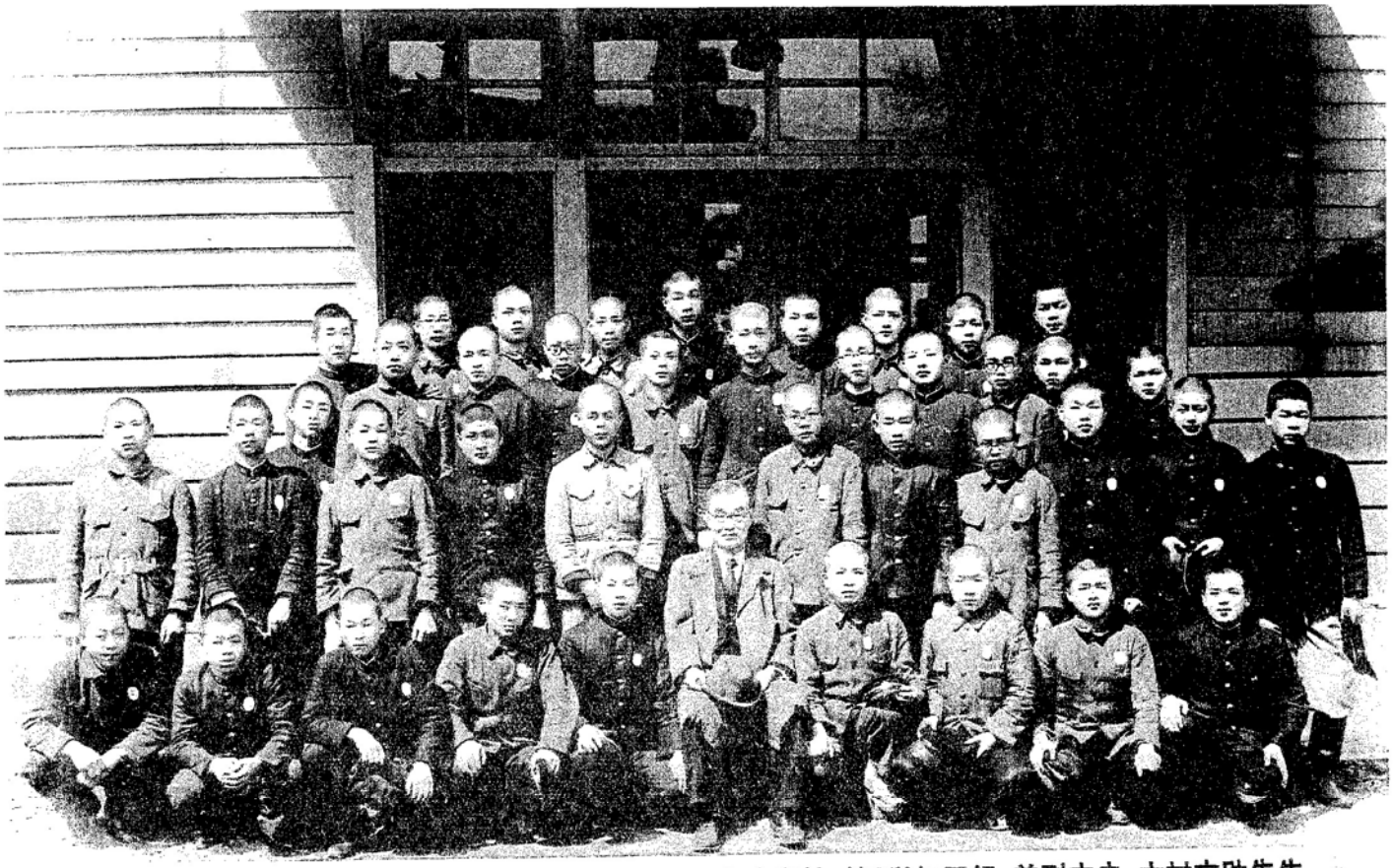
一九九九年「赤い鳥」復刻版を全巻購入し、教育広報「おおの」に初めて「赤い鳥」、「綴り方」のことが載った。

大正後期から昭和初期にかけての「赤い鳥」に載った大野尋常高等小学校の綴り方作品の入選作が、「おおの」の二〇〇二年一〇月号から毎号一、二編紹介され、町民に読まれたが今年一月で合併により途絶えてしまった。

子どもたちの素直な作文には驚嘆を覚える。当時の大野の生活を子どもの目線で表現しているものは、これ以外のものは見つかっていない。

一度だけ紙面の都合により休んだだけで一三回にわたり綴り方一六編と方言の解説、鈴木三重吉選評、自由画も合わせて一、二ページを割き掲載していただいた。大野町教育委員会と編集委員の皆さんに敬意を表したい。

掲載の数だけいえば「赤い鳥」に五九編入選したので、まだ三分の一に満たない。北斗市になっても継続してほしいものである。



1943年(昭和18)4月23日 道議会議事堂南側玄関　昭和中学校 第2学年甲組 前列中央 木村文助先生

写真提供;札幌市 平中忠信氏(前から3列目右から4人目)

資料閲覧（赤い鳥・木村文助コーナー）

「北斗市郷土資料館」

旧町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側、木造の建物です。

〇四一―一二〇一

北海道北斗市本町二〇〇

ＴＥＬ（〇一三八）七七・六六八一

開館；九・〇〇～一二・〇〇

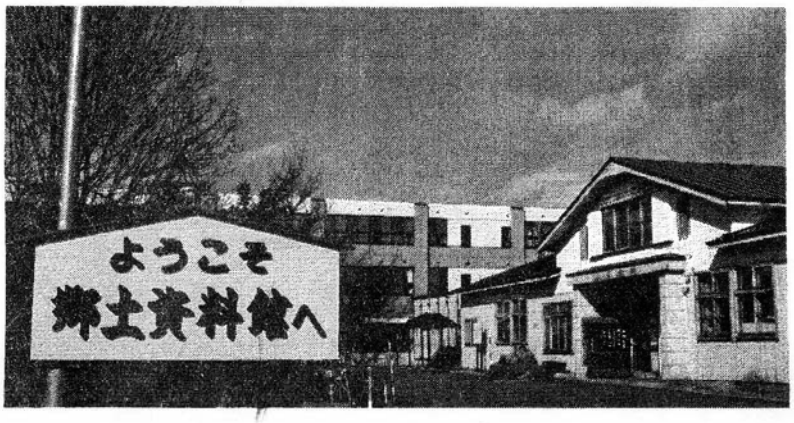
一三・〇〇～一六・〇〇

（郷土資料館係が対応します）

・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください。

・函館方面→車で、国道二二七号に入り旧大野町市街地まで、20～30分。

・道北方面→車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、一〇分ほどして大野方向に入って右折し、更に五分で着きます。



編集・作成；会報委員会
木下寿実夫、国塚妙子、古俣芳衛、
小松真之、島津昌二
発行；大野文化財保護研究会
（略称文保研・ぶんぽけん）
〇四一―一二〇一
北海道北斗市本町六八
会長　木下　寿実夫
（〇一三八）七七・八五三五